要馬秘極集　十二・十三

麻布大学所蔵

西安馬秘極集巻之十二　藥方之巻

益飼

芋のくき　三年　　芥子　一年少りて

大豆の粉　一年　　米　二年

えん豆苗　二年　ひまくけ用かりて米ぬかを上細かにくだきみて

小麦　一年　　くるみ　老久かりて

燒鹽　土竜　おくまもり入れて六殘り加馬よりて用

右細末して大豆の米ぬかを久常北通弼の妻

さけをそそめ米あらい酒の糟一斗稅一斗大くく

めとりて米をもつて右の大豆のまふこめを
入れ煮てさ湯にて此醤の中へ右の合義に
おこみうるまりて絹へ一日より一本ほと入
七日程絹へ一日に大豆も常乃通り絹七
何なる度せるうたん十日の内より二度かきう
まつ何汁出て入るとき味付けより強ふの
白根成よく煮て此けけ出て此の合薬を何
度一中也馬成女の内にうやす秘伝の方之
但絹より出るやすの方より馬よりて絹馬する

大豆　一本　煮やうとき大豆を炒りて粉にして
稗（ひえ）　一本　かハをさらひて日ほり
こぬか　一本　但併薬のこぬかをかくふるひて
白米　一本　大合
大麦　一本　くだきてひて日ほかと
餅米　一本五合
米のこな　二本　細みこなこ

軍用

あるとき此性より人を付へし

大豆　二升　大豆と茱萸とを一ッ入てよく煮

人參　二兩　桃白皮　二兩

威靈仙　三兩　仙人草　二兩

沉香　二兩　胡麻　いのこつちの根　右分細末して一升加へ用

右細末して二升の大豆より五味の茱萸ひらを
よく大豆のよくく煮ゆる程にして茶煎
と大豆を煮りて大豆計を取て粉にする
右の茱萸より水を一升入右の麻を煮て煮
合の煮し絞て是と右の細末とを粉へ

折まぜして日に朝夕用ひ煮しらの
茱萸八拾四是は右の茱萸細末してひらけ
入合ともよし是を用ひて馬精氣を增し
奈息不絶魂魄を安し四是の骨を強し濕を
冷の不食成進め諸の虫を治し諸脾虛
して馬形をとろへ不成治し大小便成
通し幼弱正しき者新の飼也平馬に
も時く獨なりて何へし中氣下所の
馬まへ切く用てよし軍場にて出成用れ

大分ハ大豆銅ヶ銭ヶ内銅女一周迄入馬
腹ヶ分事一入ヶ内銅入袋皮ヶ入て金袋
の板ヶ毒方ヶ結を付鞍ヶ後腹ヶ付ヶ
又二つ入て毒の力草ヶ也も付ヶ

平通数　結馬ヶ用

牽牛子	一両	牽朴	五分
茴香	五分	桂柳子	五分
大黄	一両	枳實	五分
芒硝	五分	陳皮	五分

枳殼	五分	續隨子	一両
青皮	五分	牛蒡	二分

右細末して陽ヶ水にても用ゆべし

上結と見へハ　黄芩　黄連を加へ　青皮

陳皮を抜き

下結と見へハ　桔梗根を加へ　大黄

枳殼　枳實を抜き

虫結と見へハ　木香　茯苓　黄柳を加

馬熱出てハ　芒硝　枳殼を抜き

を加へて　木香　槐仁　干姜を加へ
胃脘塞せし　石膏　芍薬を加
腹脹ハ　香附子を加　厚朴を加

同　銘強瀉

瀉通散　半匁　芒硝　一匁二分
牽牛子　半匁　榆白皮　半匁
茯苓　六分　正通丸　三粒

此丸薬ハいつまても斯方一服より三粒にて一夜
明丸薬ごとけさ白様ゆして用ゐ外ハ細

末にして陽少にても水多にても用
瀉通散ハ大腸ずまりを二度服をあけてもよ
て一度ハ紅花を一匁入一度ハ巴豆二十五六
粒入て二つを服通しあらをさしらる
ゆをもてとかす水へ一夜浸け置て搗すこし
ゆ多あけ服通しあらをして黒焼ゆして細末
にして茶ハ飲也巴豆毒とて
正通丸ハ小麦の麩とをの円よりてまる
くひらげ丸中へ水ゆ練大まめ位ゆ丸ル

ふせてよく煎じ用ゆ 小児驚癇に用ゆ
しくらじ 種々悪くけぶりうるさき成
種うすくぬくいめうしゆ用ゆ 種多く焼
もりて水出てあらひ幾分も右のかすと
一分小用へしぼる 悪ふくらも高の池出て
三粒用ゆ 幸もあり 深通敷ふり紙 楡白皮
幸牛子 黄してふ汁出て用ゆ
右此方小用て不通 事形強く逐出 故
腹脹中多し 軍場急用の秘法也

茵栖散

茵栖	五分	滑石	五分
木通	五分	車前子	五分
瞿麦	六分	沢瀉	五分
知母	五分	猪苓	五分
芎藭	一分		

右細末して湯出て水出ても用ゆ
冬と見へハ 茴香を加へ
熱多ハ 瞿麦を倍す

承結ス用

同銘強通

茨柄　三文　内一文八生一文八ミ繊　一文八ミ

草蘚　三文　木通　二文

白朮　一文　車前子　二文

耳草　一分

右細末して湯水にて飲用ひ

和魚散　出陵　結馬　尿結　合病ニ用ひ

良香　二分　黄柄　一文

枳殼　二分　厚朴　二分

槲柳子　二分　菊香　二分

三稜　二分　耳草　一分

右細末して塩湯水にて飲用ひ

馬痩せハ　良香を去ル所

結馬と尿結ハ牽牛子　梅槲子を加へ二三服用

て如何ものくハ右件方を用ひし根本ハ

毛の本葉也

尿結と尿ハ木通　草蘚を加へ用ひし

黄色ものの抵ら尿ハ出ものハ本紙

本草綱目に曰く加減して丸を作る
よし丸膠は寒熱をに曰く
右病馬数多ありといへども結馬尿結血腹
に三つ当るべし道うんづくて直しえがたきあり
て世天下の名人と称する軍中急
病二方伝授して本馬と称して秘すべし
心を尽しこれを考へ命
延命丹
人参　一両　名人せうせう　六分
龍脳　八分　麝香　六分
小黒焼　一両　塩硝　半匁
青花　六分　沢瀉　半両
右細末して蜜丸て作る百病ともに効験有
息利也軍場出せつき時八ちをなくなよ
ばくの薬のごとくに付ありのくせつる
時を馬に与へる息絶ともも不知ものの故よくなる
あり
名人せうせう　五月五日六月五日の内うあるべ

四よりもらくれ行をこへ法の中へ入百日程色て
ゑあけらくあらひて行を折割て人屋て中に
塩のやうなる物をまきて黒成あり先て
あんせきと云件の行を法先こめて入壺
白頭散　皆もり一切愈薬
大頭黒焼　五文　牛皮黒焼　六文
石灰　五文　羚羊角　六文
竜黒焼　五文
右細末して一切いへ薬飯擂よりつけ雨水滴
ゆて移りても付申也

鐵足膏　四足之裏痛秘方
鮎腸黒焼　五文　鹿角黒焼　五文
女乃髪の落黒焼　二文五分　水銀粉　二文五分
鉄のやすり粉　五文
右細末して猪の油黒焼して古き松やに成
入てよくけらを合せ時に薬成入移り合せ
加減八行よ薬成置て人屋の両方へうちまき
ぐ程ぬりて夫中へ入れあくる日是乃裏

痛の秘方紙痛強くして一足ひくゝ不成
と云たゝ古き紙付きてく痛事のしるき
ありく毒一火丹てあるゝめ裏一盃瓦へかゝ
ぬ程よひろけ志ゝ丹門よ付紙ゝ水乃
中へ入ゝ二ましく毒一ゆゝやゝ乾時節ゝ
ゝ風く紙裏よ付き加減して焼ひろけて
付ゝ中ゝ中意也馬紙立てゝ沢薬ゝ
門よ付ゝ乾ゝ軍場ゝ秘密也
ゝ秘也

平頁馬ゝ巻 第五

平痰散

川骨 一両
熟地黄 一匁
鹿角霜焼 一両
人参 半両
茯苓 半両
右細末して さゝげのしけ切 わゝ白ゝ小合
丸して黄一酒代大ゝ加人用回丸ゝ毒ゝ時ゝ

石見川霜焼 一両
百草 一両
川芎 一匁
赤小豆 一両
牽牛子 壱十両

水ゆても用ゆ

胴の内へ血をかけるべし　芍藥

きさらり　赤分ゆて加ゆ

首の内より手負痛ゆ　大黄　射干を加ゆ

頭の内より手負頭をさげ物成不見是ハ不重ス

まわり　たいそく根を加へ（[illegible]）也

又方　川骨二兩　鹿皮若　白豆生　各五匁　石見川骨各十匁　茅乃霜

右細末して酒ゆて可飲

同方

鹿角黒焼　牽牛子　川骨　天南星

各赤分細末して常のごとく飲へし　胴へ血滝さしバ

苛茶を煎し飲へし

疵の血下の事

牽牛子　杏仁（ゆんにん）　ちんぢやく　白粉（こなこ）

右細末して赤分牛膝を煎し汁ゆて飲へし

亦云枳椇を煎しても用ゆ也

血通丸　千負ゑく結馬血下ニ用

人參　一両半　黄芩　一匁二分
大黄　一両　胡椒　五粒
芒硝　一匁二分　巴豆皮を去り　七粒
荆芥　一匁　紅花　六分
右細末して　●　芒硝より丸て五匁三十粒湯より
換茶をこくうすして用ひ手負馬繋ぎ用
胴の内血落つまり煩ふ也尿出ぬ時
草蘚　木通を煎じ汁也て可用
矢のあらひ方茶乃事

腹より矢あらうて膀胱を入へ方茶乃事
烏天蓋　童子の蠅養　女髪正見
右末分細末して芒を付て押入馬の尾ゆてぬい
て宜へ　ゆやあぐさ　まつ葉　茱萸　くこ
あらら茶　芒硝煎して手汁紙ぬらして洗て
右の茶方西のあらうゆてとりて付へ
矢のまらう紙ぬくへ方也
耳鼻　かうのあぶら　かち栗
右水分より押合て赤茶の方くい也て口をとりふこ

右七月之薬方

苦菜散

鳥貝 黒焼　白茶　赤章螺 黒焼　鹿角 黒焼

右末分細末して疳に加らきてこがらしの湯
にてとろろして付へし　経久しき疳虫にたゝるべし付
にてとろろして付句也女の疳疳虫へ油にて押合て
疳へ押入る

生命散

手負馬氣付

人参　一両　小黒焼　半両

蒲黄　一両　葛粉　半両

右細末して手負馬氣付くちい口見不自由
にて食まいかく見てとゞ此薬成角ゆ窯出て後
ても同薬也

正留散

血留二方

竜骨　一両　蒲黄　一両焙て

虎皮 黒焼　一両　女松葉緑　一両

右細末して疳に水捻飯丸強くふき出て蓬
ものもの付疳に水押付散也

同断

猪牙　五八草　各ホ分　右細末して一切血留めるこうがいの耳ナ三ツ後馬の舌の上ヨ重匿

疵洗薬

萩瘤　茨栢　ゆやのぐさ　枝の葉　車前草　各ホ分

右色試薬して山汁ナて疵洗薬を付る也

抜薬

ヰ草　うち栗　いぬ虫の巣　さうしの根　各ホ分　右細末して加うるの油ヨて練りて矢の根留りうるよ付ケとぎ抜ヨ付き入ふる也

ゆくゆ内火猪の油ヨて練る也

疵付薬

鹿角　黒焼　一両　牛皮　黒焼　一両

五倍子　黒焼　一両　牛角　黒焼　半両

赤章螺　黒焼　一両　為頭　黒焼　一両

天南星　半両　炭天蓋　半両

右細末して胡麻の油ヨて付ケ薬疵練疵ヨて庇

浮きたハ　山のいもをすりくけづりきざみたる茶を付
入角〳〵腹膨たる所ハ　をゝこと馬の尾ハてらく
ぬいて山茶花ハ付たまりハ虎杖根をもて
うくハきまのあぶらと共ぜて付る也　腹うけ紙
しつらりとして馬代をせこ所やうにとゝのへたり
手負馬療治い法〳〵ともと人とも軍場急用書
中書ものゝ手負所時税角〳〵腹帯をとく
角〳〵ゝ法〳〵茶あるく角〳〵ゝ用ハ茶等ハ
用意ゝ人〳〵

四天定養散　長三ヶ月法病ゝ用

茯苓　梅干黒焼　牛膝　各ハ分
耳草
右細末して二分ハ武ゝを五箇ゝ用ゝ撰ゝ
せゝ湯ゝの水少て煎〳〵寒ゝく陽ゝ煎
加〳〵煎〳〵長三ヶ月八すゝ吸ハ本味とす〳〵

同鉛　長三ヶ月法病ゝ用

若辛　二分　茯苓　一両
茱白皮　一両　耳草　ハ

右細末して甘草湯又ハ酒にて用ひ
夜三月ハ苦味代本味とすべし夜ハ張すべ
からず飯毒

同鉛

白朮　干姜　秋三ヶ月腹痛に用

茯苓　神麯　各不分

右細末して湯より酒代加へ用ひあるいハ甘草湯
乃水少して飯へ　秋三月ハ辛味代苦味とすべし
冬三ヶ月腹痛より用

同鉛

牽牛子　和大黄　菖蒲根　各不分

耳草少

右細末してくるまの汁より酒代加へあるいハ丸して用ひ
冬三月ハ苦味代辛味とすべし
五月の内ハ耳味代本味とすべし
右四方ハ平時の打撲痛腫足分うるさく沢
四季ともに兎代用ひ疝證代うんづへ張代
戸代飯へ

軍場懐中の方　第六

生延龍馳散　万病ニ用

龍馳　一両　白朮　半両
桃白皮　一両　茯苓　一両
村立　半両　干鹿　一両
土瓦盃子　一両　良香　一両

龍馳の皮骨奥ヨリ

右細末して式錢を五筒ニ匂合病ニ応
加味錢以て万病ニよろしく用ゆ又立加味
匂汁のかげん第一也但病馬ニハ一錢入七筒

本用半錢入五筒ニも匂合一口傳

右加味ハ骨
熱病ニハ　柴胡　黄芩　木分ニして
加へ甘草の水ニて用ゆ何ニも煎ハ常ニ
ニて匂合
寒ニハ　干姜　良香　加へ湯ニ酒を入
用ゆ合
結馬ニ　芒硝　牽牛子加へ湯ニて用ゆ
深結馬ニ　庭床　榆白皮　加へ湯ニて用ゆ

尿結ハ　出股ハ　淋病ハ　肩反ハ　古肩古疝ハ　糠疎ハ　ちくこハ　内羅ハ　頭内羅ハ

草蘚　茵陳大　沢瀉　千姜　苟菜　遠志　縮砂　良香　数冬花

瞿麦　加へ湯ニて用ゆ

接梅子中　加へ塩湯ニて用ユ

草蘚　加へ湯ニて用ゆ

黄蘗　加へて右同茶

當帰　加へて右同茶

恵冬　加へて右同茶

松緑　加へて右同茶

数冬花　加へ湯ニ酒を入用ゆ

實蒜　加へ酒ニて用ゆ

三味ちくこ内羅ハ仁庚子

諸眼病ハ　黄連

つゝて用ゆ

大癰ハ　芍薬

て湯ニてのゞ酒ニ代女加へ用

大風ハ　石尺川　芎藭大　干漆中　加へ練ニて用

陽風ハ　枯婁根　當帰　加へ溫ニて用ゆハ

ちゝ入ちゝ〳〵知やちへ〳〵

息風ハ　石尺川　芎藭大　葛粉　加へ溫ニて用

川芎　加へて陽ニ酒を入て用ユ

胡麻　加へぐゝの汁ニ酒

山茱　加へ松のみどりをすゝ

急風ニハ　桔梗

用ゆ

早風ニ　舟原

内風ニハ　柴胡

ろくせんして用ゆ馬ニ水式ケ去りくひたまし

強筋病ニハ　桂心

強疼ニハ　没茶

打身打疼ぬゝ草踏ニハ

湯ニして用ゆ

耳草　加へ漬ル酒をもつて

山慈姑加へせてきれ水ル壓

白朮　加へすげの根もつい

毒脱味加へ湯ル酒を入用ゆ

白物ニ加へ湯ニして用ゆ

牛膝　大黄　加へ

呼吸をし眠煩ニハ

湯ニして用

牛ニ衝迫　竹ニして法さ座いるを煩ニハ

川骨　苟茉　加へ湯ル少して用

中風ニハ　麻黄　毒脱味加へ湯ル酒を入用

楽息絶ニハ　訶利勒　莉蘆　加へ水ル土をうき

ちて上ちをして用

腹中ニハ　牽牛　併茉粉　加へそだ湯ル用

強毒喰ニハ　五倍子　挽茶　加へ水ル少して用ゆ

丁子　白朮　加へ

牙関ハ　芦毛馬肝　毒脱ル
加へたる味噌ハ酒ニ入用ゆ
鼻血ハ　紫檀　串柿加へ湯ニて用ゆ
ちりとひハ　干姜　栝蔞根加へ水茶にて用
血尿ハ　苦辛　山巵子　加へひとりゞ
白帯ニ赤ち水ハ　麻實　白且　加へ湯ニて用
血糞ハ　麻實　没薬　加へ湯ニて用
かろせハ　麦麩　桂心　加へ湯ニて用
たゝらハ　川芎

涙を吹延を流し煩ハ
加へて湯ニて用ゆ
腰折ハ　牛膝　白木　蔵霊仙
ちゝ汁ニて用ゆ
乳を痒ク咳ハ沉香　苟菜加へ豆ニて
則寒則冷ハ　肉桂　生姜　加へちりとりて用ゆ
寸白ハ　干漆　薏苡仁加へ酒ニて用ゆ
牢撲ハ　黄芩　村立　加へ湯ニて用
囚寒ハ　茴香　辰砂加へ甘き井水にて用
桂心　加へ酒ニて用ゆ

腎虚ハ　兎絲子　芍薬　加て湯に酒を入て用ル

とくさりハ　枳殼　人參　加て右同様

虚冷血ハ　黄蘗　續斷　加て酒少て用ル

寸白間〳〵下ル　干漆　鯛の骨　炙して粉ゆて湯ゆて用ル

頭風ハ　紫蘇　川芎　加て心のいもをとく

すりて酒に入用春夏ハいも。洗せてゆきの水よりとりたてを用ル

吐屎ハ　地黄　かゝとりどの粉　大酒に

塩を入水ゆてのべて用ル

吐血ハ　紫檀　人參　加て湯ゆて用ル

秋風ハ　千齡　苦蒻　げり　加へかるまて

用ルたゝきちり血ゆ出ものゝ

ゆ負馬ハ　川骨　熟地黄　加へ小豆ゆ煮

そ汁まて用ル

あらり目ハ　虎肉　黄連　加へ茅の砂ゆ水に

のべて用ル　ゆの眼病にすゝ　あらり目ハ板木を焼て

あくまを遠ざけに　白物　ちりぬ　水分まして
ふるく煎りてあら目の方ハ耳乃中へ詰こむ
きかくみ　松緑　苟菜　加へ　遠志　女大黄　女
黄して女乃小便を入用ひ
皮膚ハ　苟菜　地黄　桔梗根　加へ
水まて用ひ成ハ煎ケ湯ハ入へ
血熱大癰ハ　山茱　石見川ハ焼　加へ　松の緑
牛膝　黄しゝ山けまて用ひ
折傷ハ　石見川ハ焼　桔梗根　加へ　湯まて用ひ

息陽ハ　蓮肉　青皮　加へ　水まハ土を入へき
たてまつり水まハ葛の粉を入用ひ
ひ孫ハ　半夏　砂まて七分煮て　紫蘇　加へ
山のいも成おろして用ひ
股及ハ　苟菜　干姜　加へ　松のみら成煮
一用ひ色ハ　ちまて水まてひや長へ
色ハ　苦参　杏仁　加へ　南天竺の根干
姜ハ黄一せ　ちまて水まハ湯成加へ　ちまて用ひ
肉筋ハ　串枡　縮砂　木香成煮湯成加へ

をけまて用ひ

癲筋丹ハ　石見川大　訶利勒小　人參小　加へ

水桑まて用ひ口長ひやとくこと能ひ水にてけ

ひやすへし

病馬見立之事

熱病ハ目の内赤く赤筋とり鼻あきひらき極て息

早く毛身よ付耳ふれさんさゞ冷し　取り息大に

あらく成腎熱とす　鼻大よりあきひらきさんあゞ

ふくらかを上實とす

寒病ハ目の内赤く淡く耳鼻すゝ身の毛立

て冷ちゞ馬形部ハ見少し

牢熱ハ右の熱病よ似て似ると腎の腎膽

の腎の冷三焦よ熱こりて水ひやせとも

ふくふ成云熱病のさめそこ引ハ證と為

因寒ハ右の寒病よ似て似ると腎の腎膽腑

の冷三焦ハ寒こりて燒水を腎の腎膽腑

ゆ證と可為

結馬ハ あらあらあらく息あらく冷ちゞ皮股細く

上實して耳の根にあせを膿しかの下の毛立て筋
中結はおきあり わるく腹張て長成るあり身成るを
たり 下結は身成ず逆毛多あり て腹張たるま
えるまて腹成ず尾を持て糞を出すを知るよりを
腹大に張て苦たちぬは玉結と知へし 馬氣寒よ
見苦所多也 腹はあり中央に尾をさし鼻長
間脹也 息くるしく口成あるは水毒也 所の腹
すれば 結馬急に あやまりを以て腹ちりを尾をさすは
種形く可治

尿結は 腹成ひくくあり て ちりを
をたちり近 て あるの あるを成るあるは
黄多 氣沈のくよりあり 尿成女て牡を見歯
をくいたあ口成あくあるよわるを氣は必死 尿結急
あやまりを以て腹ちりあるは可治
深結馬は右結馬のくく牡を以て時く水の如
なる氣養成女 腹ちり成ず逆 鼻あるく
牡を熱て穴より分尺 養るより血
たるを出て種て牝時くるて尺あるを熱をもひろ

げうしくる所ハ後々にあらハ必死を
血脹ハ腹はりて背返り急にして左右へ身を打
返し息はやくしくしきて尾をふるも馬死期に
見えハ治する也
背反ハ背骨はり下へおして瘤く舌は息早く出る
大腸の血背へうつり所也穴より白き物多く出るハ死
早風ハ息早く踏き息をはく亦おこりあしの様にも
見る所血熱の所也
肉羅ハ馬死ぬるに見えて吹間のてうし一様にして

皮脹大に動く也肉落ハ吹不出して前に大きく鼻
を出し後ハ頭の内なる也　肉乱ハ吹てふしふ定して
あらく吹時口を土近くして皮脹よりともの尻大動
き上り下りの也　頭の内なる息あらく皮脹上て糠
草を踏ミ目くるまり取て鼻息あらく舌を噛
たまる所ハ必死　肉羅息にかなや止大皮脹下り鼻
の内あつまりて　ぬる草は噛ハ頭にて可治
大風ハ織に背をうつめ歯ぎしりをしきて耳の根に
汗出て死也

陽風ハ俄ニ振て両ちくみ眼赤くしるし
息ハをそれるのも
息風ハ俄ニ息あらくして馬氣癡て死も
内風ハ息あらくさわめて早し耳の根ニ汗か
てあるべき事也ニて炭ハ脾の臓の驚也張也
泄瀉するし
急風ハ息あらくさわし血漿の如し
ぐるるハ俄ニふるひて四足共一所ニ立て耳の根
ニ汗出て鼻ちゐ出ル炭ハ小腸の冷ゆる

ゆるてもあらくさわ高ぶる
ちゐひハ馬乳ハ門ニ出て熱ハ悪瘡出ひろる
ゆるる事あらて馬甚わるく如也
皮腫ハ熱身ニ梅或ハ桃ニ似ニ同ちゐく腫
後ニハ顔腫也目腫ふさぐ大漿ニ炭ニ成ニ
ちゐらへ腫来ハ如しニ成蓑炭ニ成
きくハ骨髄を痛ミ肢ニ漿ハ多くさしれ
多成ニ成ニ立ニ成ハ痛ミ方ハ馬成ニ流也
番ハ也

諸毒喰ハ服ゝ毒遍身ニ汗出て息早くはらり
黄水を流し涕を垂る
虚冷血ハ汗をとゝて身ニ紙かゞ多ゝ毒ゝて身
のもとすゝめゝ物ゝ
腎虚ハ陰上ゝ毛ゝ抜ゝゝ出て腰ゝゝ下の分
の皮つまりゝゝえゝの自中不叶也
寸白ハ虫のゝゝ煩と云尾を次股間の通
ゝてゝゝゝ下る事ゝ下陰と八寸白
間へ下り間脹て煩ゝ寸白ゝ紅鼻ゝ黄気ゝ

水ゝて流ゝゝハ必死馬ニ乗ゝ見ゝ法ゝ水流
ゝ毒ゝ
たゝらハ頭ニゝゝ或ハゝゝ腹ゝ
ゝゝゝて物ゝ
牙関ハ歯をくいしめ目の内ゝ白ゝ物ゝゝくびの
ゝゝゝゝゝ不叶遍身ゝ筋ゝて皮ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ尾ニゝゝて物ゝ即時ゝ流
事ゝゝ話也間是不瞳自中ゝ見て物を
ハゝ物ゝ死

則寒則冷ハ牙関ニ似て是ハ歯をくいしめ尾をさき
を尾をまくはたえずさかりて死也
乗息絶ハ馬の鼻がさんとすれとも息たえずして則
汗出て死する也
中風ハ尾脱自重不付少鳥頭乃節へまさる遍
身乃毛立て息早く口鼻冷へ多くもれ始めて
おくれ候ハ筋骨内より不付也同く是身の皮
肉まで舌を是歯をくいしめ眼の光なくあけ尿乃色
黄赤きは必死

頭風ハうしろのさけ数年も出てわきの方によ
是の所らしぬる草の蹂躙也
吐屎ハ口より糞を吐草の吐さ死する事也
秋風ハぬる草のうちに得られた是歯悉くぬけ
蕃防のの大切の死之瘡生池節れ死る事悉し
太うき秋よ入死ふるもの也
ひ称つさりハ毛をぬけ又防よりるこ立てとく
毛ぬけぬる草をうとみ大切の死也太うき秋を
来る気も此証ありきれいきりと出也

股及ハ常ヨリ堅固カラズ俄ニ手足ノ指ビレモダレ
自然ト吐ス足ハ此中風ト知ベシ
諸瘧ハ法瘧炉附ぬゝ草ヲ煮テ服スベシ
ヨハヒハ治セズ早シ悪瘧数多炉治シテ後
又再發シテ吐時内羅吹ヲ用ヒぬゝ草ヲ煎ジテ
加ヘテ服ス死
眼病ハ諸眼病ノ時目ノ瞤ヒ始テ牙ヲ見
ル大ニ苦ミ炉ヲ治シ
子負馬ハ疫ニ成ヲ除ク痛ミ次ニ或ハ矢疵鑓疵
ヲ負モ少シ成ル所ヲ苦ミ
吐血ハ口ヨリ血ヲ吐ク朝夕ニ云ヒ一度ニ
多クハ出テ血ノ色ヨク赤キハ治シ暗色ニテ
古血ヨリ多ク出ルハ必死
壁ヲクハハ口ヲ見ヒ頭成ヲ或ハ家ヲ
引ヒ立テ立ヒ物ヲ付ヒ物ヲ食シテ寒ル
ひ即時ニ死ヲ川ノ流ハ高ク山ツケ馬ニ乗リ
乃至死ス
内損ハ胃ノ腑大腸ヲ

のどに成かゝり水よあく事多く煩く焼裏強くロ
をあく所にあらざれハ必死
癲筋ハ人乃癲ん乃ごとく俄に発れ口目ゆ
涎泡をふきたゝくに死一時けるて暮成つきおきく
馬まとりて手馬とりあてにいぞくへそ拾るゆ
あり手まゝ拾ものもあり乱血とも云ものもあ
乱血とも云
すくゝハ ちぢくあり酒一五脱乃ごとく口目
帰樊して悪血ゆりて水とかまてかさ物ぎ節陰

龍草芝月の過よりて抑て月経の下潔
くなりたるゝ大たるゝハ常見立あるとゆ節を
をゝ沢山ゆ沢山ゆ前ゝ成立ゆ物つけ沢
肖貌ゆ白史うでゝび皮肉の間腫少びの下ゆき
をくゝ書知へ
龍馳ゝ かゝす角びのはゞの下に黄色或ハ茶色さ
ゝうつき或ハ右の角乃筋ある角びを生ゆうゝ
酒ゆ一和ひして早天ゆりあげ竹乃角ゆ
うゝ尾ゆ切て拾天ゆけゆ入焼へゝ

乃間日数某はる

餅米の酢　　村五　分量しお分

右三色の草紙数て煮上へ地紙まげて蓋又蓋びり
上へうけ蓋乃ち

舟原　　きんとん　　そべ

糯小分りして地の上ま蓋ら紙ら敷て敷ま
又右六色乃草紙お分りて写ら加ら上けを包
ふ上ら紙藤ま敷て強くげ極ら紙上ま強わりて
黒焼ま寸ら上焼ら所上蓋の上ハこらげ敷て円乃
黒焼を以て彩りて形某ハ原也　色紙敷地と
云わ黒焼ともと云

息命丹

莉芦	三両 生黒焼 香色	沈香	一両	龍脳	二分
縮砂	二分	人参	一両	訶利勒	一両
小黒焼	二両	香附子	二分	茯木	二分
白木	一両	苦楝皮	二分	生脳	三分
草撓	一分	木香	一分	薫陸	一分
安息香	一両	乳香	二分	梅子肉 水ニ漬塩ヲ出シ	一両

辰砂　二分　蘇香油　一両　耳草　一分

右細末して蜜にて練り合せ丸薬に記

同方

小黒焼　五両　丁香　二分　訶利勒　一両

沉香　一両　丁子　二分　苦楝皮　二分

人参　一両　香附子　二分　草橈　一分

乳香　二分　白朮　二分　薫陸　一分

龍脳　一両　木香　一分　生脳　一両

安息香　二分　梅干肉　一両　茯朮　二分

犀角　一分　辰砂　一分　茉莉子　生黒焼　香色　三両

縮砂　二分　塩硝　一分　石膏　一分

蘇香油　二分　石菖蒲　二分　耳草　一分

秘薬

右細末して蜜を湯煎にして泡をとり丸蜜の丸

ほどに丸薬味代五六味ほど練りて三日置て又丸薬の

薬味代練りて三日置て後蜜の丸ほどに丸薬と

練りて一日一夜置て丸薬何も無薬味ひとつに入

砕く練り合せ仕げんろう時香物に入ても入

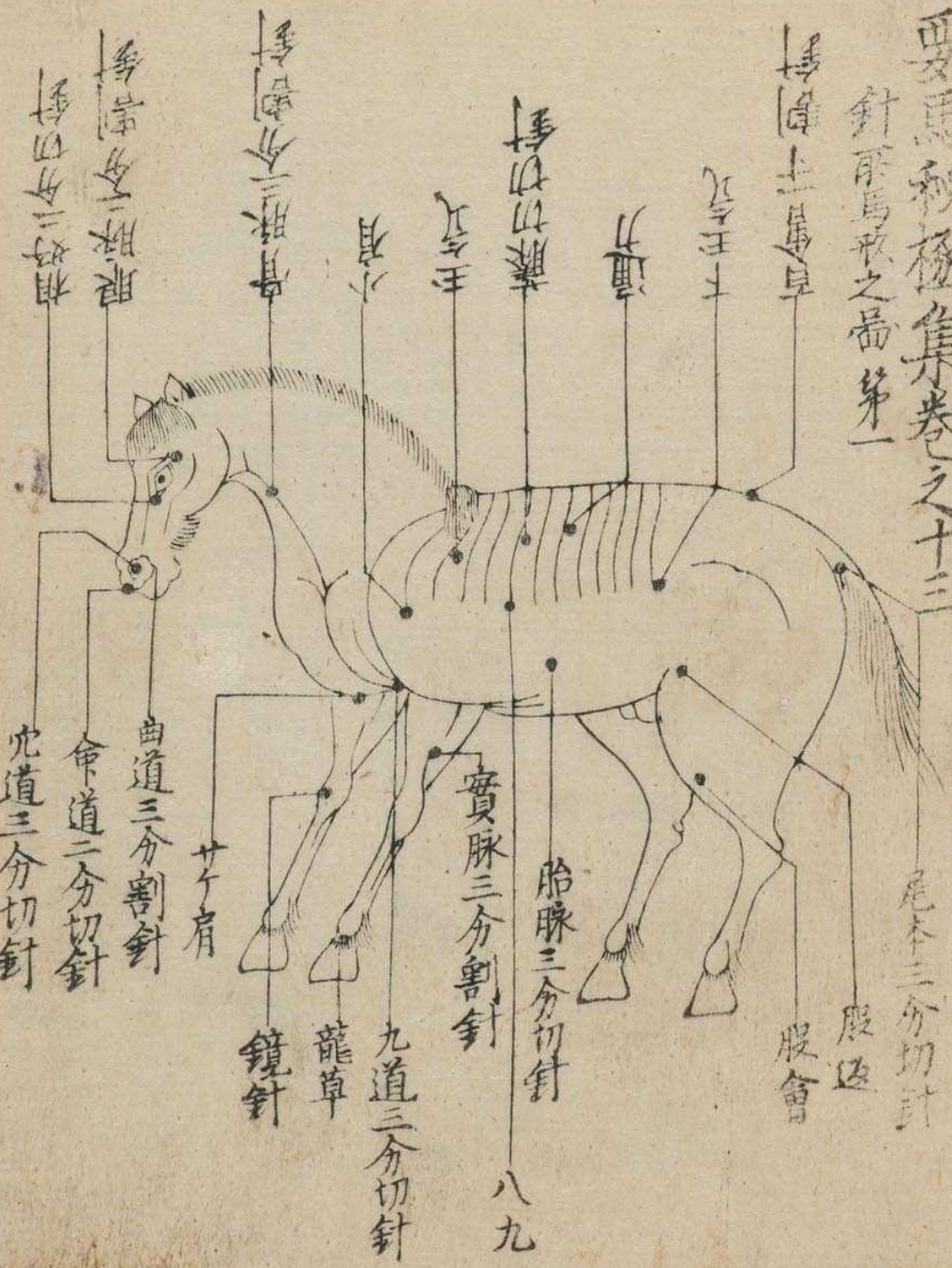
様ゆへ七日を経て後ハ百病不用所第一秘
密乃息相也二方共に調合時薬種成吟味すべき
事専要也小豆焼灰付ハ六味五八草先調合べし
右此薬方古来より家傳之方也軍場急用を
達せんため加味くわ減を為て万病を治し之調剤を
集て是を記す右龍馳之紙ハ諸の命を助る秘法
事の一上熱下熱をさまし胃之勝を涼し温寒冷
之不合を進め内羅之疫を切し動乳を抑め疫癘を
除き乱病を弱め大小便を通し歯寸白を治して乱を
勇心を正し萬病を用之合せ可申伝

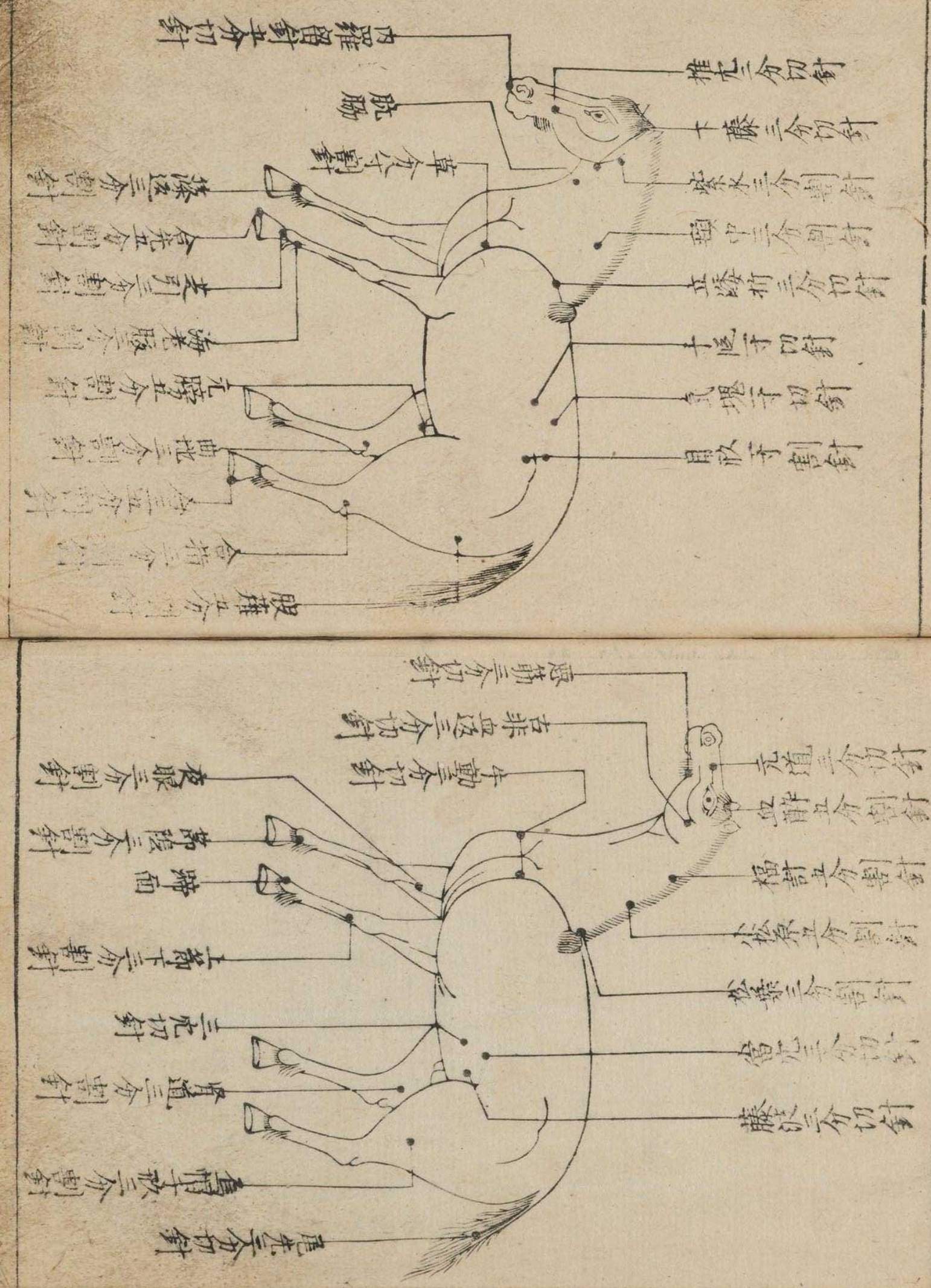
要馬秘極集巻之十二

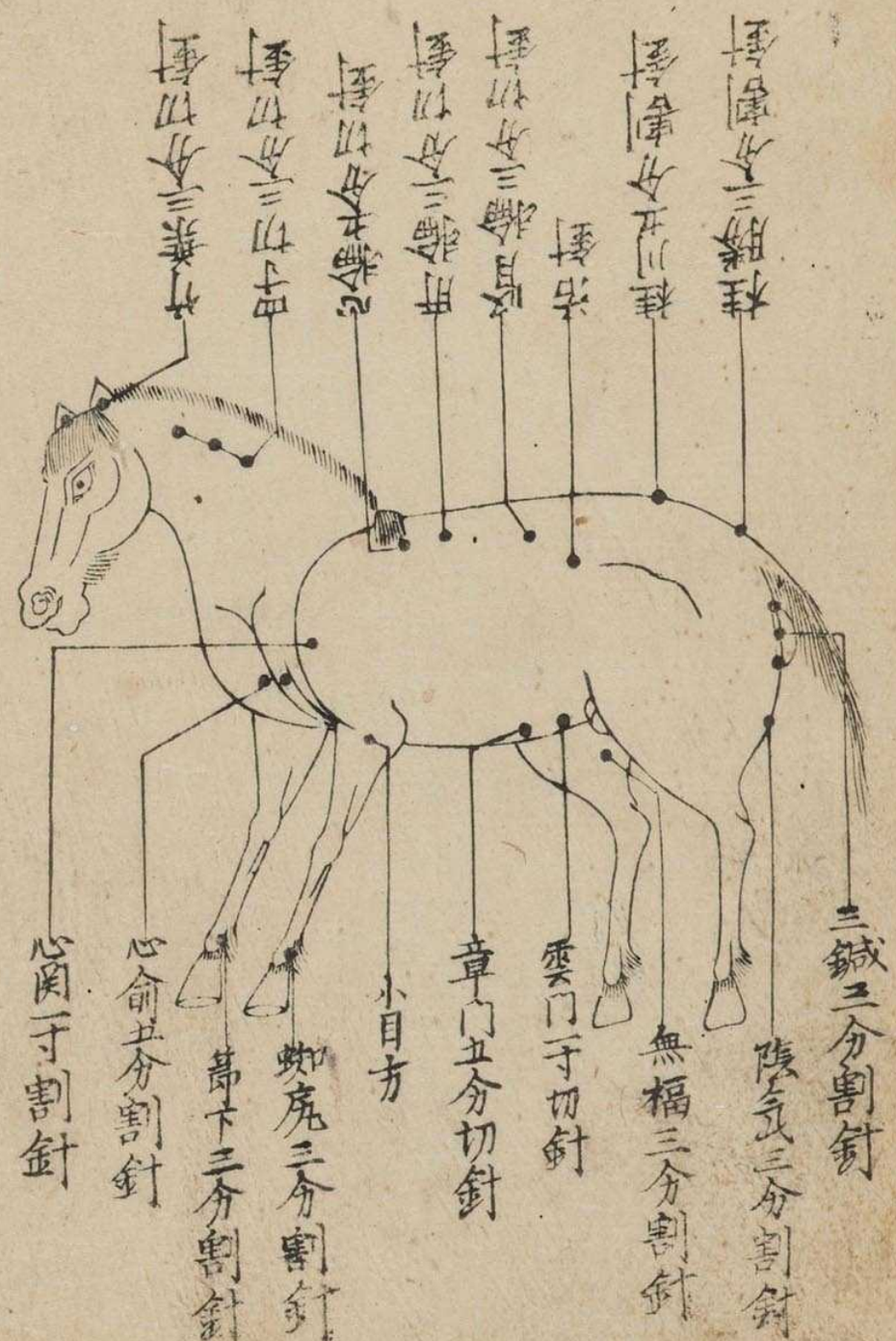
薬方之巻終

要馬秘極集巻之十三

針馬法之篇 第一






三鍼三分割針
陰氣三分割針
無福三分割針
雲門一寸切針
章門五分切針
小目方
蜘蛛三分割針
節下三分割針
心俞五分割針
心関一寸割針
竹葉三分切針
四寸切三分切針
鳩尾分切針
肝腧三分切針
脾腧三分切針
腎腧三分切針
腹腧五分切針
肺腧五分切針
肩腧五分切針
上之井
肩門
子之井
土元之穴
膀門
合門二分
肺俞
雲門并灸
合指灸
腎俞
尾中

上六豚之夏　前面六門第二

相好　乃ちりといふハまるこの前より下乃
ちをしりへ出うくるとさすと二分
血をいるをこと五合あまりりろくの熱頭小
のりるをこと目蛭そこを上寅一
切くんひやうは用針所る形りあり
命道　乃針とつふハうハちりのたりをこの
うやくはそりをさすと二分血をつこと事
半分ものくのちやりやうはそして血の

いろり口傷ありまつる時ハちやうんようと
入の血をおさへてあるようにやうして散ら
ハやまつりまつりてそこふちつむハ大切し
推穴 のそりといふハちりさいそくりをき
てらこさまふあるちりこりのそくようそり
とさすこと二分血をいたす四合あまり脾の蔵
の熱ハ登あくひをねむりまつる用円鉢
の上実をさまつ服病ようし
穴道 のそりといふハちるのあくようとそくちら

穴あるそのけつようをちりをすこしかさ二分さしく
ちをいたす夏五合あまりこれハ頭のねつよ用まさい
くく内罪久敷よ用
幽道 のそりといふハあるの才三ハはそくようそり
とさすこ二分ちをいたす五合あまり脾の蔵の
ねつよ用まくそちのねつよ用上実をさまつ
が鍼灸をのせよ
元道 のそりといふハちるの上そふある血をしく
はそくようをさすこ三分血をいたす五合

あまりりろくの上実をさます亦曰内羅よ用

中六脉

脉脉　のもりといふハ耳の根もりまもりへつりる
血もしなりはもやくよもりをさます二分血をいる
もりる三合りろくの目の煩よ用

骨脉　のもりといふハ頸のもしし肱之のもりある血
もしなりはもやくよもりをさます三分血をいる
もりる七合あまり肺のやまひよ用まいそくりろ
くの息のやまひよ用脇熱を治眼熱頸熱を治を

扁鵲共の返血を生ま
九道　のもりといふハ心の下前肢の上よある血筋
もりはもやくよもりをさます三分血をいるもりる三
合あまり心の熱よ用

胎脉　のみといふハ腹中ホもこまよある血筋もり
はもやくよもりをさます三分もしてもりもりをゆひ
まて血をいるもりる三合れハ脾の蔵の熱よ用
あるひハ古脊背瘻肖瘻ハ新よりもして難
下の悪瘡よ用

腎道　のちとゝいふハ内服よりそのちの血をとゝ
のちをゝゝの三分血をいるゝ四合りろ〳〵の腎の
腐まのひよ用

尾本　の針といふハ尾本の腕よあり血をとゝりゝ脉
よりちをゝゝます三分血をいるゝ四合あまり脾胃
腎膀胱の血を治ゝ

下六脉

心論　の針といふハひゝりの折骨をゝゝて八目を
ゝゝゝ五分ゝて灸ゝへし心の冷よ用

肝論　の針といふハひゝりの折骨をゝゝて五目を五
分ゝて是ハ巻紙をゝゝて灸ゝへしりろ〳〵の月
のゝゝひゝゝ

腎論　の針といふハひゝりの折骨をゝゝ〳〵二目を
五分ゝてたゝ紙をゝゝ灸ゝへし是ハ腎虚の五痳
よゝ取分血淋よ用

肺論　の針といふハ右の方折骨をゝゝ〳〵八目を三
分ゝて灸ゝ内罪よゝ

脾論　の針といふハ右の折骨をゝゝ〳〵六目を三分

ときてはものをくるしめ気を乱堀ようまいをくる糠
草跡より用
命論 の針とりつけハ右の折骨をとるべく二目より針
をとるべき五分是をはものをくるしめ気をしりくの冷病
より用 以上十八脉如此

験針之巻才三

古非血返 の針とりつけハ三ケ月骨よりあらためて
ちりはらくよりをとるべき三分血をいるべき四合
わきりもろくの目の病日上実を冷を

紫水 の針とりつけハ耳の根より骨脉下の血筋
わるさ三分をとる頭の熱水草不食より用
牛動 の針とりつけハ九道の上りこのをくより
をりをとるべき三分血をいるべき五合四是
をかの用
夜眼 のをりをとりつけハをくをしの下をりを
をとるのかせをまをよさしを血をいるべき四合あ
まり大難より用亦云ををりをくをとるべき
実脉 のをりをとりつけハ夜眼のこをりの外をり針

とゝのゝさ三分さして血をいるゝすゝ半外分すして
かゝるゝ馬ゝ用
小肩 の針といふハかゝるのたい肉の下ゝりゝる
と五分さしてたゝうゝをゝして少灸を小肩
癱瘓の癱瘓折ゝ用
節下 のゝりゝといふハ鶏子の下ゝりのゝせゝ
ゝさして血をいるゝゝす半外分是を踝折ゝ用
節陰 のゝりゝといふハ鶏子鶏ゝの尻ゝりゝの脇ゝ
ゝりゝとゝすゝ二分血をいるゝ五合ゝ血をゆゝ踝

折ゝ用
龍尊 のゝりゝといふハ鶏ゝの中ゝりゝ下ゝ
の血をゝをゝして血を四合あゝりゝをゝこゝ血を
踝折ゝ
條返 のゝりゝといふハ龍尊ゝりゝの方へゝりて
ゝりのゝさ三分さして血を五合ゝをゝ血踝折ゝ
ゝ
合門 のゝりゝといふハ爪ゝ毛ゝのあゝるゝゝ是も
爪踝折ゝ用

三穴　のきりとりハ胎ゑくの血をしの下りふ
ゑさ三分きて血を四合てを脾の蔵の熱ゑ用
藤波　のきりとりハ三血の下りきの方へきりを
きりきしなりきのゑくゑきりをきをゑ三分
血をてきをゑ五合餘結のねりを冷をまきてく
糠草珠ゑ用
當穴　のきりとりハちをし竹骨の方へきりね
ゑりこのゑくゑきりをきをゑ二分血をてゑ
ゑ四合結の悪瘡古肖癩ゑ用

竹葉　のきりとりハ耳の中なり乱血ゑ用
福討　のきりとりハ笄六寸下かきの中なり
上藤ゑ用
松葉　のきりとりハ取髪の中なりゑくの筋
病ゑきて上きを鉄灸をせよ
小松葉　のきりとりハ福討松葉の中なりきす
ゑ五分是をりゑくの筋病ゑ用
通力　のきりとりハ折骨をかをへて五目なり疲
筋ゑ當てゑさ五分きすをれてきをりゑ

う用

千陵　のうちにいはく背をかがめて四目なり上の目
かたうちをどやりをへうをひきてあさ一すすを
ろくれ爪まひる用

桂川　のうちにいはく百舎の下六寸下をさすなるを
あさ五分ばかりをうかがうをうをろ
くの下部の冷うるを用うるさ肩うる中風
る用

桂勝　のうちにいはく桂川と尾本の中なりうと五

分ばかり灸をこれを中風る用

陰気　のうちにいはく間の根うち庇服へうち血筋
うちこのうくをうをうをさするの二分血をつをこと
半外分結の下撫る用

無福　のうちにいはく内服うち外服へうちる血筋
うちこれをあさ二分うち血を半外分いをうをく
ちをあるうち取分腎の虚撫る用

烏帽子形　のうちにいはく板服と小服の内ういなる
うこをあるうちをうをさする三分

血をいたす三合りろくの庇服の悪血を治す
曲地　のきりとるハ庇服の為ひのり目かりきり
とすする三分きり血ハ時よ遠ク大為小為きるつきさ
るる用
立陵折　のきりとるハ為くくのりのきれきさ
して来きらしむる別陵折より
上之玉気　のきりとるハ折骨をかきて十一月かり
きりと五分きして上をきる結病り用きまき
上実眼病より

下之玉気　のきりとるハ折骨のきれきりきりと深
五分きして負きを下腑寸白小より
治鍼　とるハ折骨のきれ三ツふせをきて目秋
のきとり四寸きけてきす大結るより口偽る
肩　のきりとるハ[illegible]のきりの方のきを
めきりきりのきさハすきして茶をこむる
鏡　のきりとるハ前肢のすのりのきめ
きさ三分指きりきを勝きるのひきふふ
服舎　のきりとるハ服の下より井ありきりを深五

分すす股返股蹉折より用中凡よをり
股返　のそりといふハ股含るの上より亦井あり元より
ヲと五分すす股返より亦中凡より
股薙　のそりといふハ尻股の肉境なりそりを深
五分さしてそりす股返より亦いそく腎虚中
風より用
悪節　のそりといふハ推穴のちをしなりおそひ
のりのそりなりそりをさすす三分血をいそす
ヲ七合佑の上実を冷し

蹄以　のそりといふハ龍草の後なりそりをさすす
三分血をいそす四合蹉折ふより
蹄門　のそりといふハ蹄以のそりの方なり口佑可
前血の合分用
蹄面　のそりといふハ合門の上なりそりのみさ
三分さして血を四合いそ爪蹉折より
海老の股　のそりといふハ鶏子鶏以の舌後の方
龍の毛の下なりそりをみさ三分さして血を三合
いそ蹉折より用

肱脇　のうちとりて八骨ぶくの血まつの内の方へうちとゝまるあて指血をいたすること五合位の上実を治す

雲門　のうちとりて八かそのの穴たりうちをたすること一寸たらずかをすき灸をすりろくの病に用取分虫寸白長痢痛ふり

上之節下のうちとりて八鏡の節の下のうきたるこのうちふうちをたすること三分血をいたすること三合餘ゴ結の躋折大癱に用

根膀　のうちとりて八間のぬいめうけてたすうち加減に口傳あること間腫水のまうこのうふに用

三鍼　服切るに用

蜘尻　のうちとりては癱躋折をうして爪まつこの痛に用

四寸切　筋の病牙関に用

藤切　のうちとりては疲筋に當て折骨七月八日のとをりをさすもしたり頭もられまつる用

目秋　一寸ばかりもぐんのきよを用
小目方のもりとりつはは後臺のあくの下なり鍼を
のりせきまふさしてきこに肩陵折り用まこい
こ小肩の陵折　いきおひしまふ用そこして
前股こここるこに用一切このもりと用熱
よりを灸をいむ
章門のもりしいはは生骨きもり四寸下をふ
うさ五分さすたこかをしきてきこを結の
棟寸踈よ用

尾先　このもくよりとりをさする三分血をいく
もこ八合ゆりよ用少鉄灸をせよ
尾中　りをさする二分血をいこる五合脾
胃腎膀脱の熱を冷を
芝門　のもりとはは龍草の下合門の脇なり
このもくよりさする三分血をてこる四合
かもりもくの癰こるり用まこいこ陵
折まと用
合指　のもりとはは曲池のもりの外なりこの脉

りうをさすり三分血をいたすり五合あまり
りうくの爲以の病りうをさするよ用
八九　のりうをさすり一すたうかをもて
灸を初中後共の内羅よ用
百會　のりうといふは肖骨尾骨のすゑめな
りこのりうくをさすり一すたうかをも
ちてりうくのあをけ冷をを絶
の病冷熱を治を
頸中　のりうくいふは頸肉と頸骨との内境よ鍼
よりうをさすり五分たうかを
をもてりうくのりうくのやまひを治
を亦云上実よりし
氣塊　のりうといふは折骨をれ目敢のりう
りをさすり一すれをたうかをを
もてりうくのむしし寸白よ用まい
り下冷よりし
血酔　のりうといふは上く并を上の方へをくいりう
り五分をもてりうを掛り血よ酔りう時用

合三　のきりとつは小ゝこのきりの方この穴
よりを五分指合のうちを痛うきうを治をくり
指やうつりらはへし
合先　爪裏のさきりこの穴よりを五分指大復
を合の内へ血落いをを治をりをくり
つりらはへし
草分　のきりとつは肩の下前肢のゝ目をりた
つを八寸入をりを入る肩拔るを治をくり
八清しの孫或八そをを治てふをこむり

内羅　の留をりとつはうをひらの毛のまき
めをりをを五分さし輕内羅り用のをしを内
羅より八をうさるををまり
心命　のをりとつは臆骨のうへをりを五分入て
たうをうをを上焦の虚心冷を治を
上々井　のをりとつは上実しあるひは小をうく
し眠煩より用
肺門　三ヶ月りのををりこのをくよりを三
分入てをしをい大腸のをれいを治を内羅

吹出痰のきれさるよ用

肺俞　内羅治しるしるひる悪相出あるひハ頭の

内鳴煩よ用

腎俞　この穴ゝをゝを五分入灸をゝ布淋病を治

をまきいゝゝゝゝゝあるひは後肢の自由

ゝゝゝゝ用

下ゝ井　のゝりといゝは老るの上実を冷をまゝゝ

いゝゝ腎をよよゝ眼病よ用

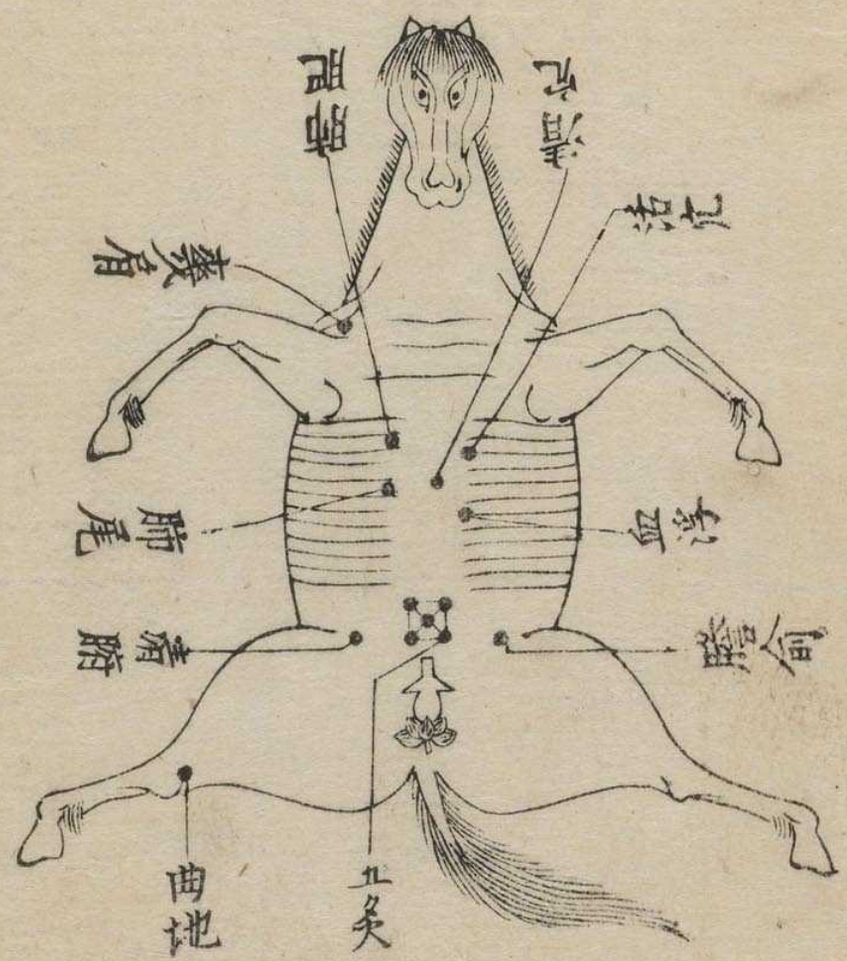
膀門　この穴ゝりをまするゝ五分たゝゝゝゝ

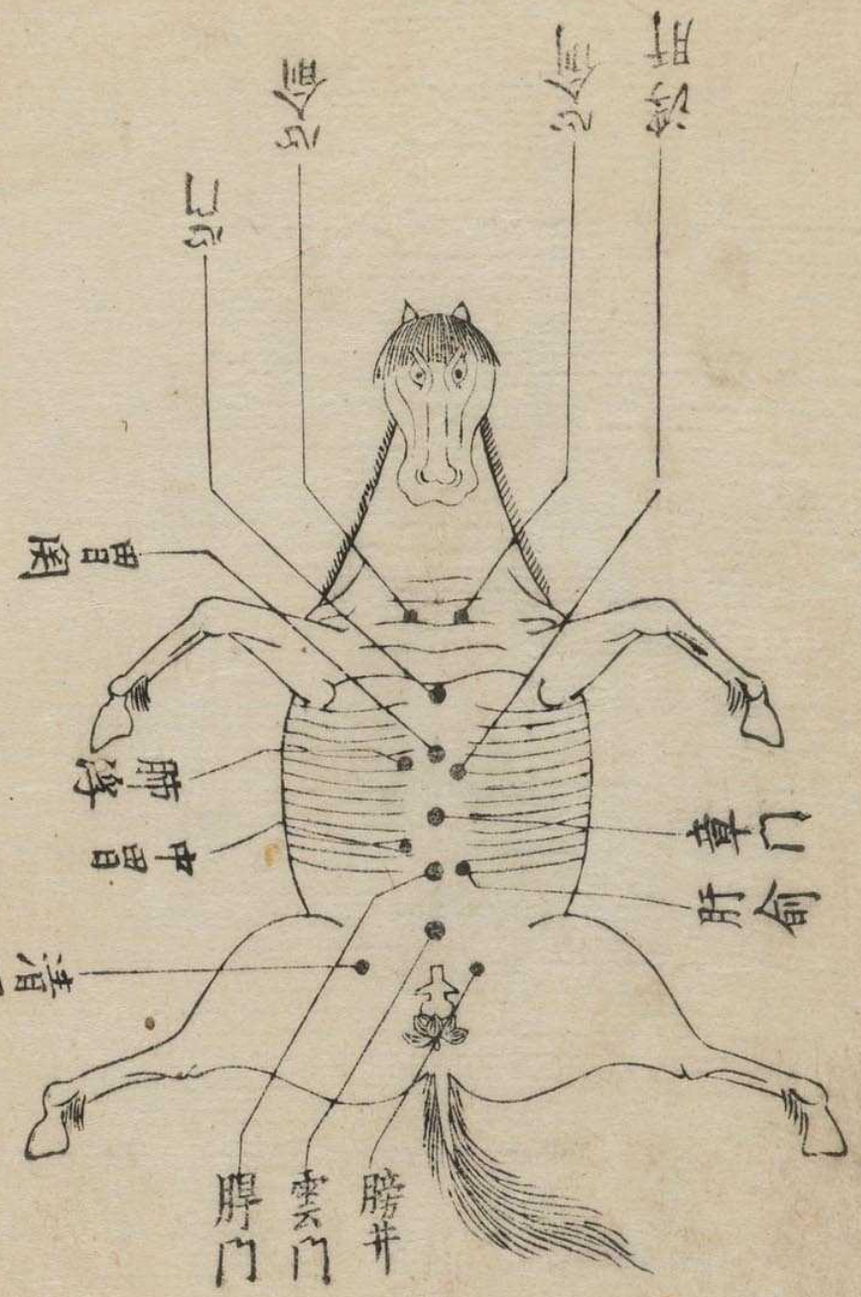
ゝゝゝゝゝを腎をゝ下冷を補

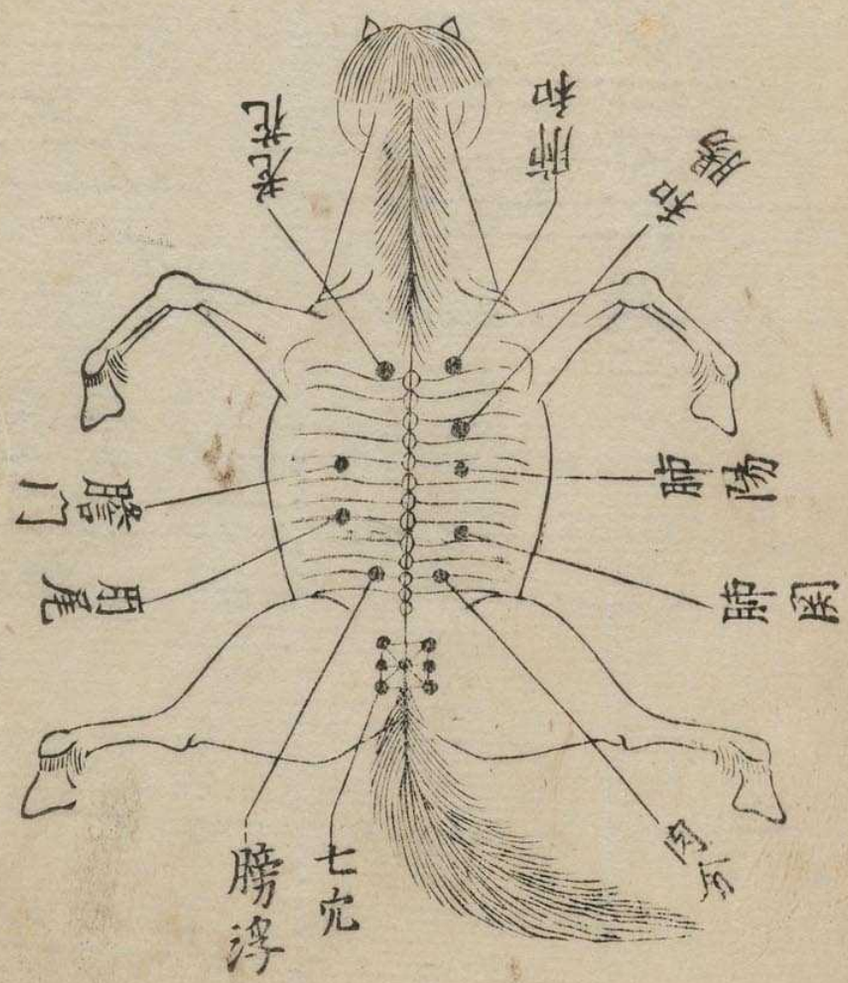
関　のゝりといゝは血気ゝをゝんゝ気市

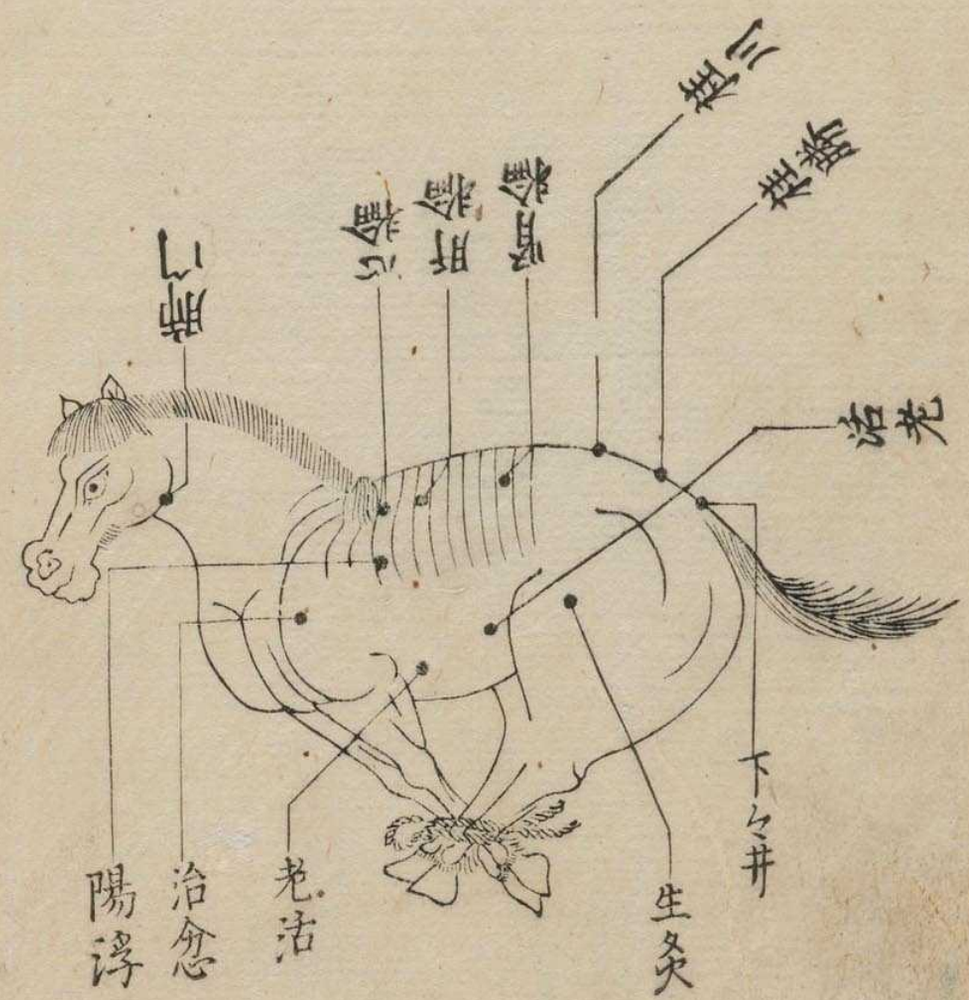
ゝ用

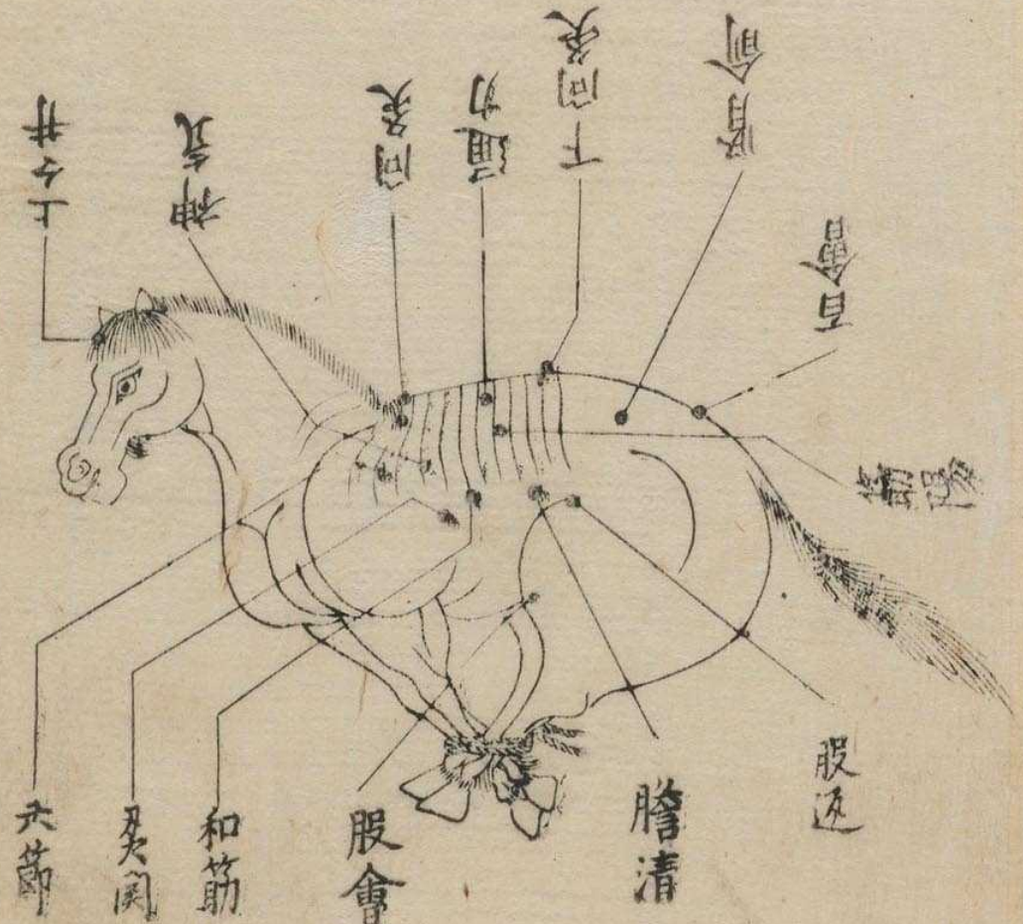
灸所馬秋之畜第四

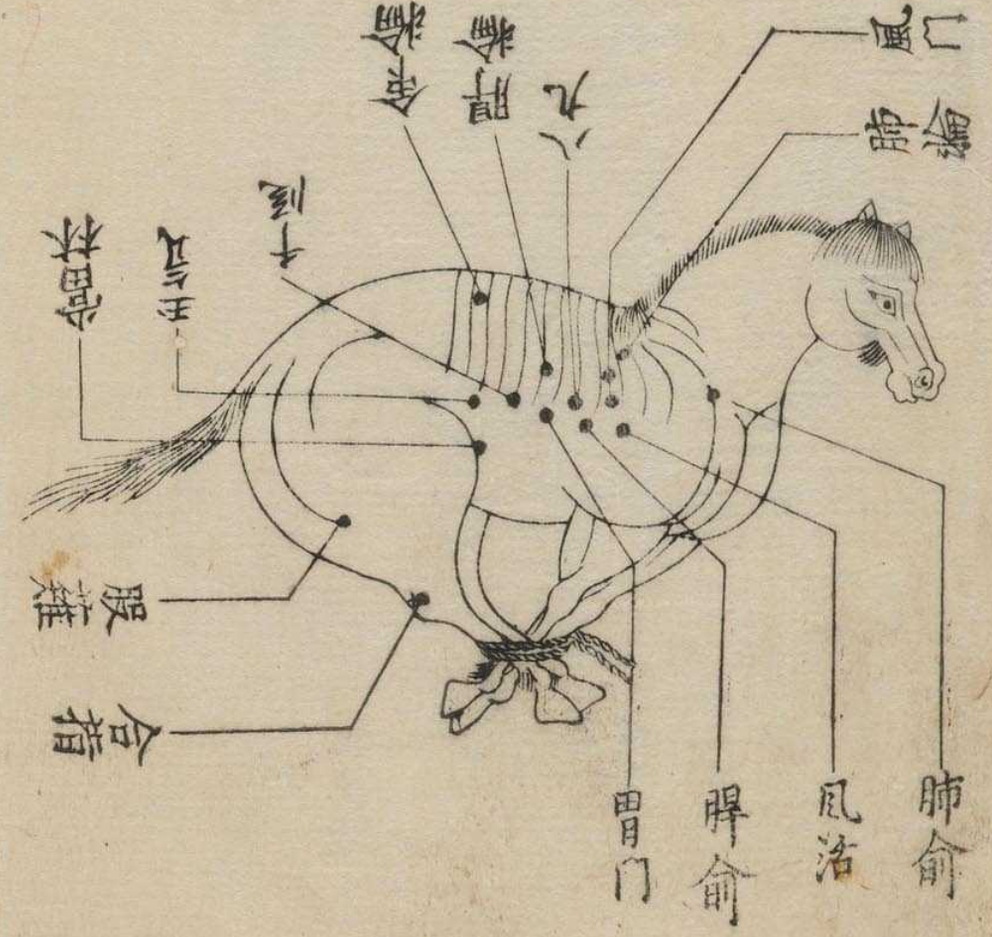


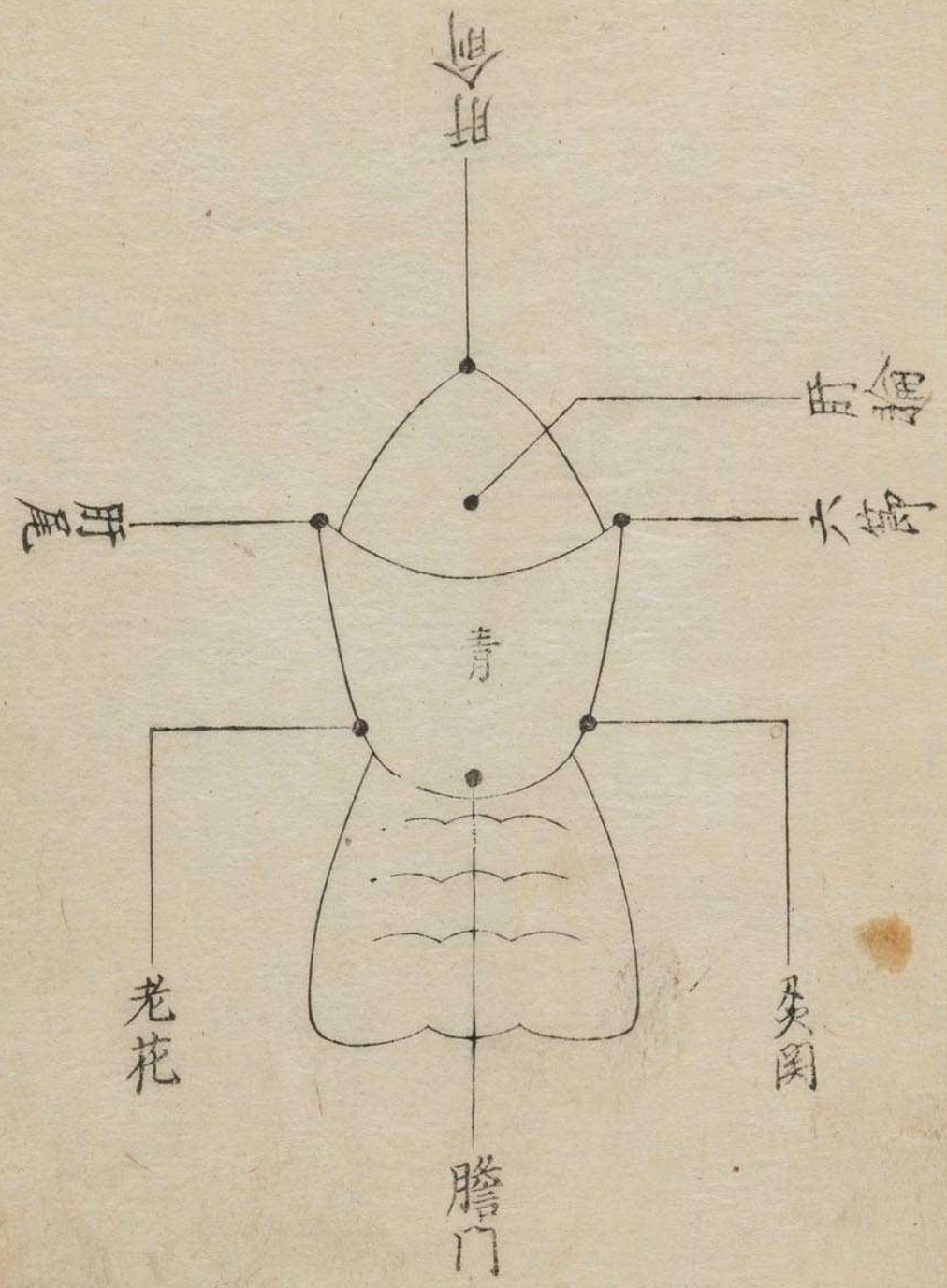

鬐甲
肩井
前膊
心門
脇堂
肝俞
中脘
脾俞
膀胱
雲門
腎門
膀井

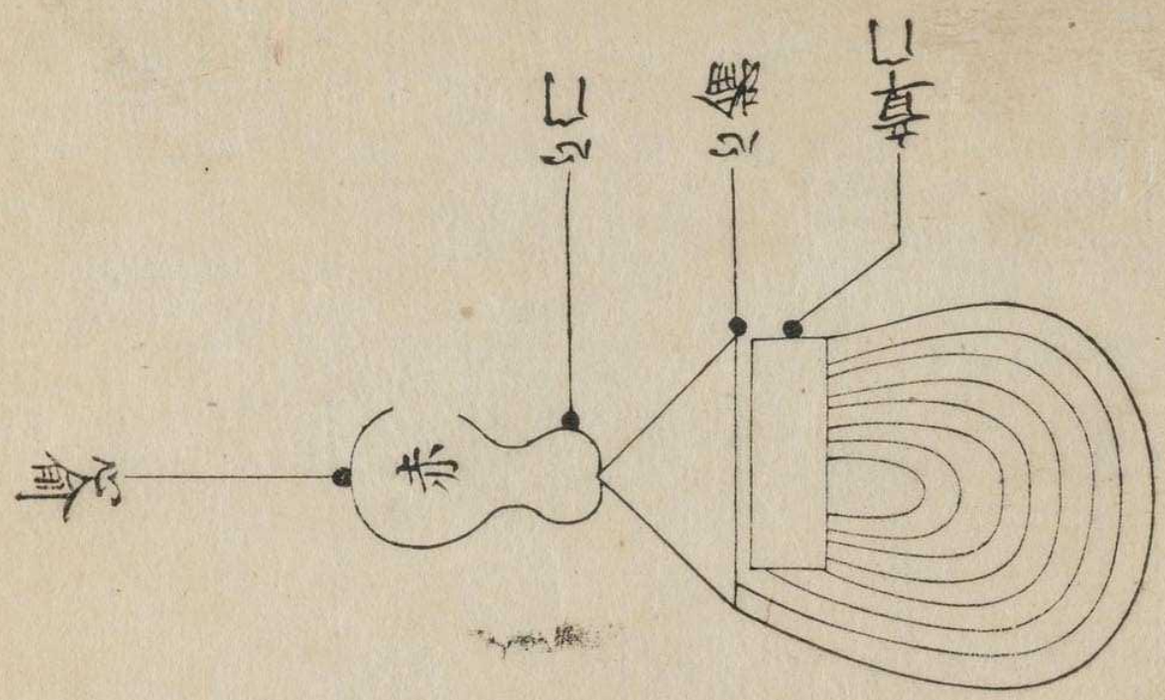

腰井
脊柱
尾椎
腸門
腎俞
膀胱
明尾
七穴
膀浮

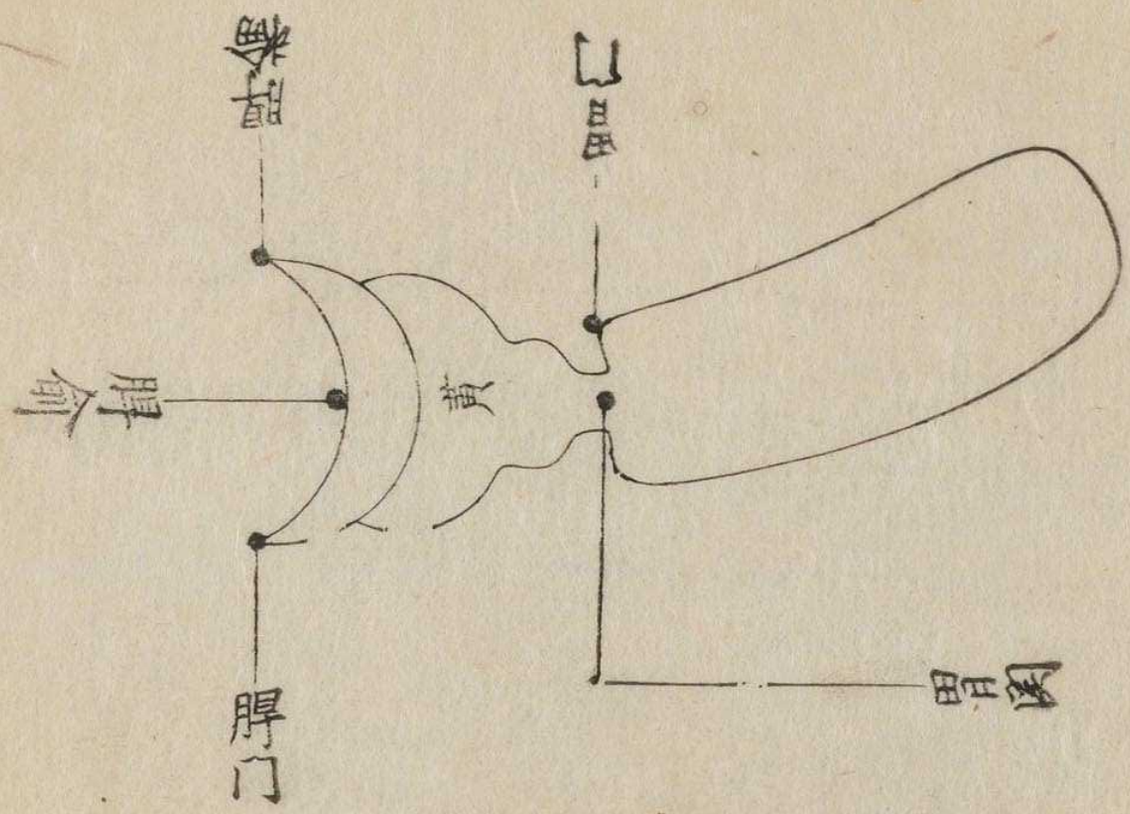

三焦
腰脊
膀胱
心經
肝經
腎經
膀胱
氣海
下巨井
生炙
老活
治愈
陽浮

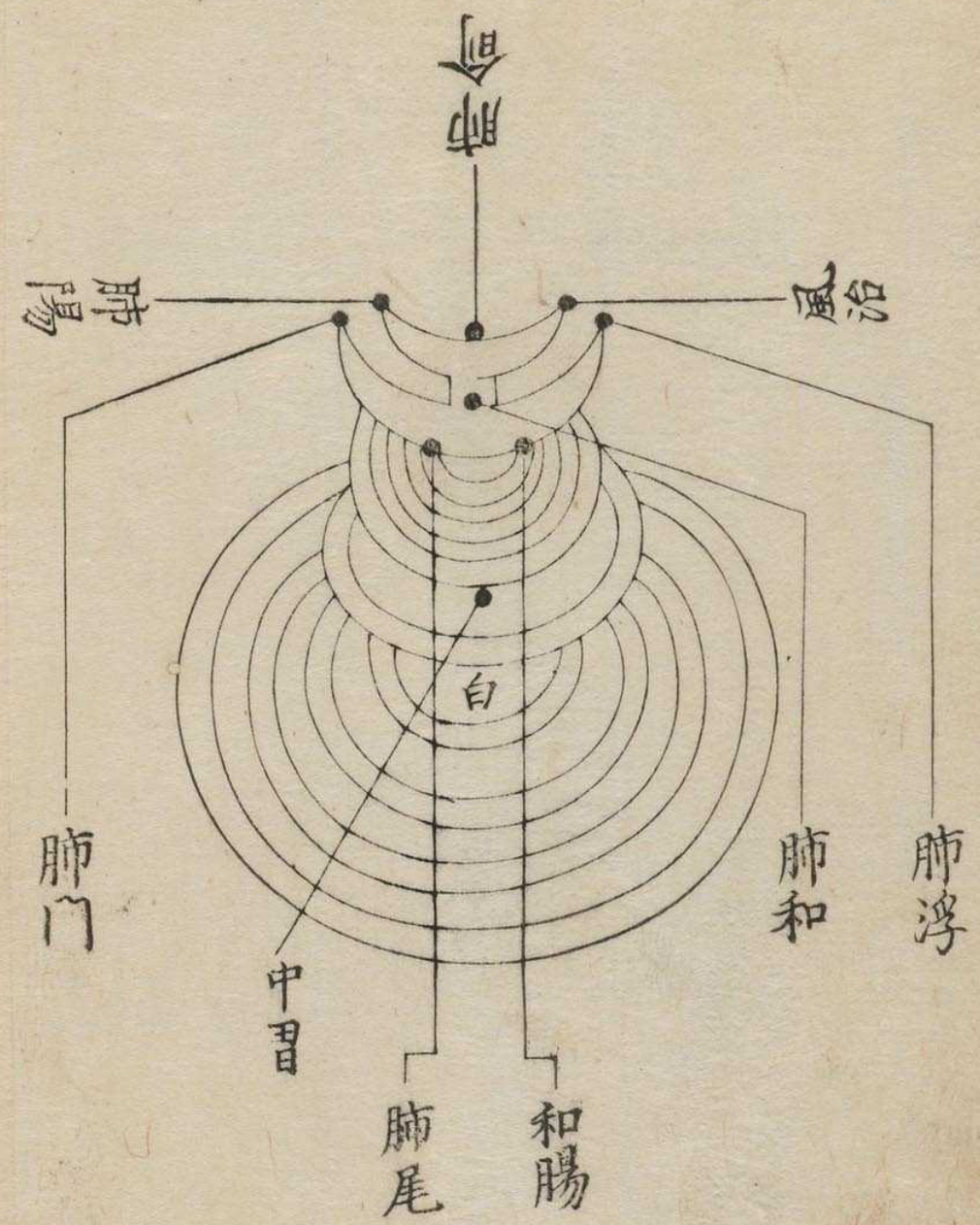

腎俞
下回泉
通力
回泉
神氣
上分井
腎俞
脾俞
膽清
股會
和筋
奚閑
大節
股近

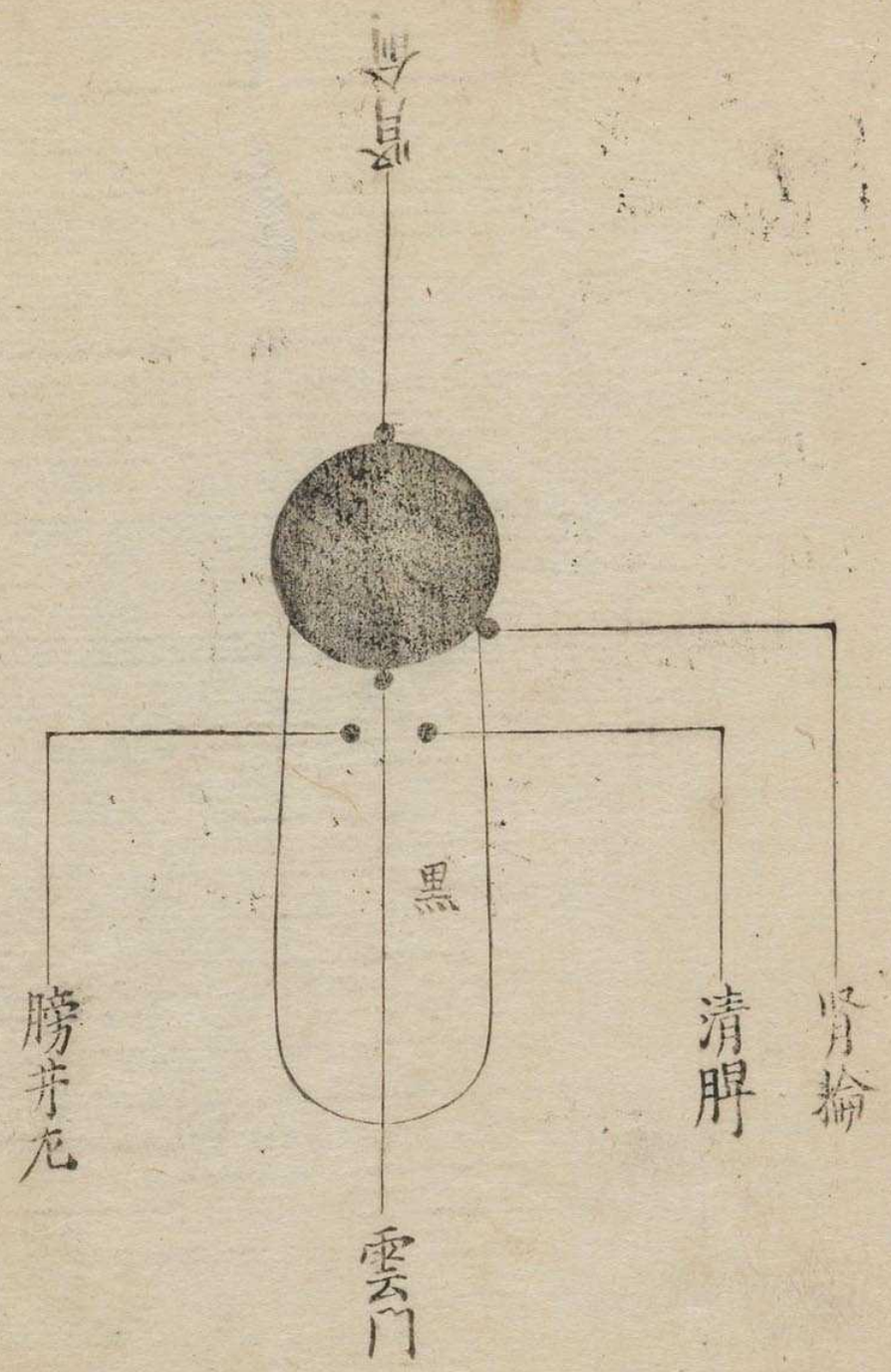

肺俞
風洛
脾俞
胃門
命蹄
昭蹄
常林
玉氣
千長
八九
脾俞
乎蹄
仁風


青
腎俞
腎水
肝木
心火
肺金
土
脾
腾门
老花
癸関


會陰
脊
心
腎心
真心


腎心
肺門
氣
心
氣海


肺門
肺浮
肺和
白
中胃
肺尾
和腸


腎輪
清腑
黒
膀胱
雲門

肝炙之巻第五

肝論　りろくの上実をさまをす脈病ようしまさ
いろく一切筋病を治す

肝俞　上勝をあらためて下熱を冷しりろくの筋
病を治す

和筋　りろくの筋病を治す中風牙関中寒を治す

膽門　気重ねりあるひしー糠牛蹂らくあるむ
り重ま用

膽清　八箇共のふちくを治す下冷を浮し風

の熱を冷す
筋陽 則寒則冷牙関をして一切筋病風病共
よ治す
肝尾 乱病をもつふしもろくの上腑のさよを
ときまる
六節 諸蔵諸腑のさよをおさるまいそく寒
腰のもつくを治す
老花 秋冬肝かれもしけり煩ふ
浮肝 筋の病小用亦云脈病ふ

老活 老るもしけりやせおろゆうり用亦ぼ
く脈病ふ
上〻弁 上実しわるひはゆもくしねりうろ
らるよ
風門 ひくの上肝虚して糠草蹄を治
貫関 上腑冷へるくをるすり用まく云く
爪性悪よ用

心炙之巻

心論 りくく乃血病乱病中風諸蔵のさよを

治す

心俞　りろくの血病を治しまくいそくひそ
きかり身を治す

心門　りろくの血病を治しまくいそく肩身毛
ぬけるふよ

血浮　裏蔵のそよを治しまくいそく血曳過煩
ふよ

清穴、眠過煩を治す

章門　りろくの堰病を治し寒ものを治

上腕登虫を治す

當林　むすたくを治小腸の虚を補

生灸　老る病ひやうを治すそして老衰の
をそる

治老　これ老るのそう心をそそりくぢんを
浮ふ

治倉　駒るそうかそすゑるを見けふ用

治穴　悪血やう風く積りて血の流行そこりわ
るひは悪瘡あるひハあまそく等ふ用

陽浮　心衰血虚し毛ゆゑ悪る用

脾灸之巻

胃関　りうゝの上をゝをゝめむしすゝく堤
病を治す

脾輪　りうゝやまひり用ゆゝけ脾胃をよ
し食疎ふす

脾門　諸腑をゝゝめ脾胃のむしんゝくを
治す

脾俞　冷虚を温補し虫寸白を治す

胃門　虚浮寒熱不定むしゝそ糠草疎り
用ゆ

肉分　一切ゝゝ用ゆゝ服帯把取り
前折ゝふす

胎中　りうゝの癩を治すゝゝ肖癩古
肖ゝ用

清腑　蔵腑内ゝゝし糠草を疎よゝまい
ゝく痰を治

清脾　脾胃の諸虚を治

肺灸之巻

肺門　内羅吹出肺冷痰の結をとるなり

肺俞　ろろ〳〵の内羅を切り頭の内鳴煩なり

八九　初中後共の内羅より用

肺浮　疲る内羅吹大腸渇とるなり用

肺陽　内羅久敷吹悪さあられ皮服あり

ろろを治す

風治　内羅堅息苦気ろ糠草疎煩を治す

肺肥　内羅久敷吹疲裏服ひそさなり用

肺尾　内羅吹鼻息あるく頭のろろ鳴煩より用

肺和　内羅吹身のうるほりとるなり

ろ用

肺輪　内羅治し再発の時これとるす

中胃　胃の腑の冷痢より用まるいろく内羅より

肺関　内羅苦扁々くさを以ちんのやまひさしも

あるひハ尿のろろ赤より用

和腸　内羅より用身のうるほりより皮服あり糠

草疎より用

腎灸之巻

腎輪　ぢんそうを用まいそく下腑のすを治

腎俞　ぢんひやうを治を久しく腰やせ虎肢自由なるを用

七穴　ぢんそうこう内羅下節下冷法下腑の虚を治を

五灸　膀胱のうたよを治ぢんひやう下腑ノ寸白奔虫を治

服返　下中風用又いそく大為小為を治を

服會　服薙法を下中風腎虚を用取分

服痛なるを用

桂川　下腑の寒冷を治を

桂勝　同前

下井　ぢんそう下冷を治まいそくぢんひやう

を治し上実を冷を

膀井　腎ぢうそうよねつ胸膈煩を治

膀俞　腎冷虫指そうを用

曲地　ぢんきゅう　久布灸庭肢くるまる不自由なる
り用
膀浮　下冷し尿そこうるよ用
合指　庭肢り悪血ためるとあるひは大爲小爲の
類一切庭肢の煩よりし
金瘰　ぢんきゅうこうり下の分のとつまりる
欣裏を治す

外灸

雲門　諸病ま用取分膀胱虫す白を治

百會　諸病小用
千隆　ちょうひゅうり用りまきしてまんきゅう
堀奔　虫を治
玉気　諸病りりまき下腑のやせを治す
神気　諸病ま用怒死薄小用
通力　諸病ま用りまき勃勇を治
上下　の同灸上熱同上冷下冷其ままうつくを
とりまき
幾肩　りとさし某を入りを肩抜るを治す

要馬集跋

夫要馬之道者非要乎乘馬耳乘馬得要之謂也始予昧兌弱之歳和有淑諸人迨今三十餘年驗之愈多知之益熟故雖乘飛兎撫五兵不失其馳有戰必勝從予學者數十百人所可以

傳者技也其所不能者神也不入神則不能殫技俟其神遇而
淖之則竟不可以傳也欲於是
乎撰其說号曰要馬集蓋要馬
之道必先得鞍繩之便而後又
當辨因其才施其用既得鞍繩
之便嗜用之宜則當因其癖而
矯繰之教化之得又其性故次
之以直其枉之道雖馬可以
隨則乎人而教論之術亟以言
語象晉故為之劔綱以道之仍
作圖說附之御者按圖制器令
鞶膝馭駘抑疾揚德皆為上兵
則未嘗不知相其皮毛肌骨故

以体見次之既得相其外則不
可以不知其内六淫所侵五臓
所受人馬固同須求其標本詳
其治療此所以医方之不可弃
也故復附菜方之用鍼灸之術
於後而欲无遺法矣凡一十有
四卷以為部噫因此有神遇者
令天下之馬悉為驥騏令天下
之御皆為王良也其庶幾乎其
蘊別有一帙在矣所謂要者寓
諸中而已

于時寛文戊申九月望日

山本乗房
市村勘兵衛
彫井深兵衛 藏版

東羨豊栄醫都
神鬼吊丈月徂仕
天津生
畧兵衛道行